

「ミャンマーの沿岸地域は、広大な森林で覆われています。マンガロープの林を保全することは、同国におけるECODRR(自然生態系を基盤とした防災・減災機能)向上の重要な事例になるはず」と強調するのは、現地でマンガロープ植林計画のコンサルタントを務める山崎秀人業務主任だ。「私たちは荒廃したエーヤワディ・デルタのマンガロープ林を回復し、自然の生態系を取り戻すことで、防風・防潮などの沿岸防災機能の向上と、住民の生活環境の改善を目指しています」

今回のプロジェクトは、日本の技術指導の下、ミャンマーの中央政府や植林対象地の行政官、植林作業員など、多くの人の協力で行

められている。それぞれの関係者の利害関係を調整しながら、業務を進めるのが、コンサルタントの役割だ。山崎さんは「植林工事における品質管理や工程管理、安全管理などの部分でも、ミャンマー側の手本となるように心掛けています」と言う。

現地業務の主なパートナーは環境保全林業省の職員だが、自国の森林に愛着を持ち、守りたいという強い気持ちでプロジェクトに積極的に取り組んでいることを感じるといふ。同省の幹部職員が毎月のように現地を訪問していることから、ミャンマーがこのプロジェクトに強い関心を持っていることが伺える。

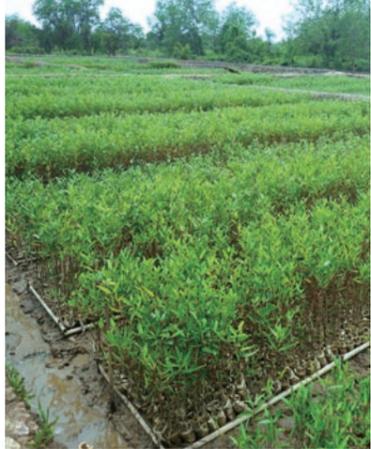
人里離れたデルタ地帯
長い目で森を育てる

プロジェクト現場はエーヤワディ川の河口に広がる広大なデルタ地帯。拠点となる現場事務所に行くにも、最寄りの港町ボガレから

サイクロンシェルターも兼ねた監視塔。森林を守るためには、違法伐採を食い止めることも必要



日本から贈られたボートで行われている日常のパトロール。「森を守りたい」という現地関係者の思いは強い



今年の植林を待つ苗。これらの木々が大きく成長して、ミャンマーの大地を守る



植林地の調査を担当した山崎秀人業務主任。現地スタッフとの関係も良好だ

「医療や教育などのすぐに明確な結果が出る協力と違って、自然環境分野は人々の生活改善に効果が出るまでに時間がかかるので、優先度が低いと考える方もいるかもしれません。けれども、防災や気候変動への適応、持続可能な森の利用など、間接的・長期的ながらも現地の住民に大きな恩恵をもたらすことは間違いありません」と山崎さんは強調する。

エーヤワディ・デルタのマンガロープ林が回復すれば、現地の人々の生活が安定し、防災にもつながる。それと同時に、地球全体の森林が増え、温室効果ガスの排出を抑える役割を果たすことになる。日本とミャンマーの信頼関係は、森と共に未来へと引き継がれていく。

植えられて半年、3メートルの高さに成長したマンガロープ



熱帯地方の海岸線に広がり、動物のすみかとしても、天然の防波堤としても貴重な役割を果たすマンガロープ。違法伐採とサイクロンの被害で大きく傷を負ったミャンマーのマンガロープ林回復に取り組み人々を追った。

森が作り出す 天然の防波堤



from
Myanmar
ミャンマー

エーヤワディ川

南国の青い海に半ばせり出したマンガロープの森、と言えば、多くの人には漠然とイメージが浮かぶだろう。実はマンガロープとは、特定の種類の木を指すのではなく、河口近くの汽水(淡水と海水が入り混じった水)で浅く覆われた地域に生育する数十種類の植物の総称だ。さまざまな生き物が住み、人間にとっても食料や燃料の供給源となるマンガロープ林だが、2004年のスマトラ沖大地震で天然の防波堤として高波の被

害から地域を守る機能が明らかになり、一段と保全の機運が高まっている。

そんな中、ミャンマーのマンガロープ林は危機にひんしている。同国はASEAN(東南アジア諸国連合)の中でも森林減少率が高く、国土の中央を流れるエーヤワディ(イラワジ)川の河口デルタ地域でも違法伐採や耕作地への転換などによる森林減少が深刻な問題となっている。それに加えて、2008年に発生したサイクロン・ナルギスは、普段めつたにサイクロンが上陸しないミャンマーに大きな被害を与え、エーヤワディ

海沿いに広がる森が サイクロンの被害に